帯広と膵癌と私

帯広市医師会
帯広厚生病院
松本（まつもと）　隆祐（りゅうすけ）

昔の「部屋とＹシャツと私」という曲のテーマのようですが、年男にあたり私が力を入れている膵がん早期診断プロジェクトについてお話ししたいと思います。

私は1978年に現在の勤務先である帯広厚生病院で生まれました。2003年卒のため医師人生23年目ですが、そのうち通算19年間も自分の生まれた帯広厚生病院で勤務できていることに運命と喜びを感じています。

膵癌はご存じの通り５年生存率が10％以下の難治癌ですが、早期診断して手術できれば10年生存率は10㎜未満で93.8％、10－20㎜で78.9％（Kanno et al, Pancreatology 2018）と長期生存が期待できます。北海道は全国よりも膵癌死亡率が高く、男性の標準化死亡率では北海道全体で1.21倍、札幌市 1.22倍、函館市 1.30倍、帯広市 1.30倍（北海道健康づくり財団による北海道における主要死因の概要 2013-2022）と高いです。

このため帯広市医師会協力のもと2018年から帯広厚生病院、帯広第一病院、北斗病院、帯広協会病院、帯広中央病院が連携病院として「とかち膵がん早期診断プロジェクト」を開始しました。内科系の開業医や病院に下記の膵がん早期診断チェックリストを配布し、該当する患者を紹介してもらい精査を行います。先行する広島県のJA尾道総合病院で成果を上げており参考にさせていただきました。2018年から2024年末までに3,320名が登録され、膵癌は最初から画像で指摘され紹介された症例も含んでいますが579名（17.4％）でした。2024年度の膵癌患者は103名でそのうち73名（72.3％）が紹介症例であり、各医療機関からの皆様のご協力に感謝いたします。今まで十勝ではstage０の上皮内癌は見つかっていませんでしたが、プロジェクトを開始してから毎年見つかっております。

2018年からの３年生存率は17％（Stage０あり 19.2％）とがん診療連携拠点病院等の相対生存率19.2％（がん統計2015年診断）、５年生存率10.1％（Stage０あり 11.9％）とがん診療連携拠点病院等のネットサバイバル生存率12.7％（がん統計2014-2015）と全国平均と遜色ないデータになっており、今後十勝地区の膵癌死亡数の減少が期待できます。

現在は十勝医師会の協力も得て十勝地区全体でプロジェクトを行っており、各医療機関の医師、技師を対象にUSハンズオンセミナーを毎年開催し十勝地区のエコー技術の向上、均てん化に努めています。

また以前は毎年膵癌について市民公開講座を行っていましたが、新型コロナウイルス流行後は行っておらず、地元紙にプロジェクトの記事を掲載してもらい啓蒙活動に努めています。2025年冬からは「すい臓がんリスク診断アプリ」のポスターを内科系医療機関に配布し、患者がアプリの質問に答え、高リスクと判定された場合は連携病院に紹介してもらうシステムも始めました。

このプロジェクトにご協力いただいている帯広市医師会、十勝医師会、各医療機関の皆様に深く感謝いたします。12年後の60歳にはこのプロジェクトで膵癌死亡数が減少していることを再度報告できるように頑張っていきたいと思います。

膵がん早期診断チェックリスト

臨床症状	黄疸、原因不明の上腹部、背部痛
家族歴	膵癌の家族歴（親、兄弟姉妹、子で2人以上）
膵炎の既往	急性膵炎、慢性膵炎
糖尿病	初発発症、急速な悪化
血液検査	肝胆道系酵素上昇、膵酵素上昇 腫瘍マーカー高値（CEA、CA19-9）
エコー検査	膵管拡張、膵嚢胞、膵石灰化、膵腫瘍、描出不良
すい臓がんリスク診断アプリ	高リスク